Miscellaneous Notes on the Plants of Fukushima Prefecture

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-02-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/00065472

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

小林 勝※

植物こぼれ話

M. KOBAYASHI : Miscellaneous Notes on the Plants of Fukushima Prefecture

1. ネモトシヤクナゲの淡紅花品 ネモトシヤクナゲ *Rhododendron Fauriae* FRANCH. forma *Nemotoanum* (MAKINO) NAKAI は吾妻山大根森附近より採つたハクサンシヤクナゲ R. Fauriae FRANCH, の重弁花品につけられた名であることは既に周知のことである。元来ハクサンシヤクナゲの花には緑白色より白色・微紅色・淡紅色と種々の色をした型があるが，その中で最も多いのは白花系統のものである。故三好学博士などの発表によると「ハクサンシヤクナゲの複弁化しているものは総て白花品のみに見られる」やに記されてあつたので，多くの人々はネモトシヤクナゲは総て白花品のみで絶えて紅花品は見る事は出来ないものと思つて居た向もあつたし，また私なども左様に信じて少しも疑わずに居た。ところが福島一中教諭の小林四郎君（小生の女婿）は昨日（1956年7月15日）吾妻山に登り鎌沼附近（標高1,700 m）で淡紅色の目も醒めるばかり奇麗なネモトシヤクナゲを数種見出した。私も此の花の数個を見せてもらつたが重弁化した花冠は実に美しかつた。尚発見者の話によると，これ等の株には淡紅美麗な複弁花のみが咲き，単弁のものも白色をした花も混在しなかつたとのことであるから，ネモトシヤクナゲには白花品と淡紅花品の2つの型のあることが瞭りしたわけである。またネモトシヤクナゲの複弁の由来については，1) 重弁花の内花冠は花托の発育して出来たものとする説（三好学博士）と，2) 複弁の源は雄蕋の変化による説（武田久吉博士・大井次三郎博士等）などがあるようであるが，前記小林四郎君が両三年に亘り千数百個の花を解剖した結果によると，その由来は 1) 花托の伸長によるもの，2) 花弁と花弁の接着部の不整発育したもの，3) 雄蕋の変化したもの，4) 雄蕋と花筒内部の共同変化によるもの，5) 稀に雌蕋の変化したもの等さまざまあつて，決して，その変化の由来は一様でないとのことである。

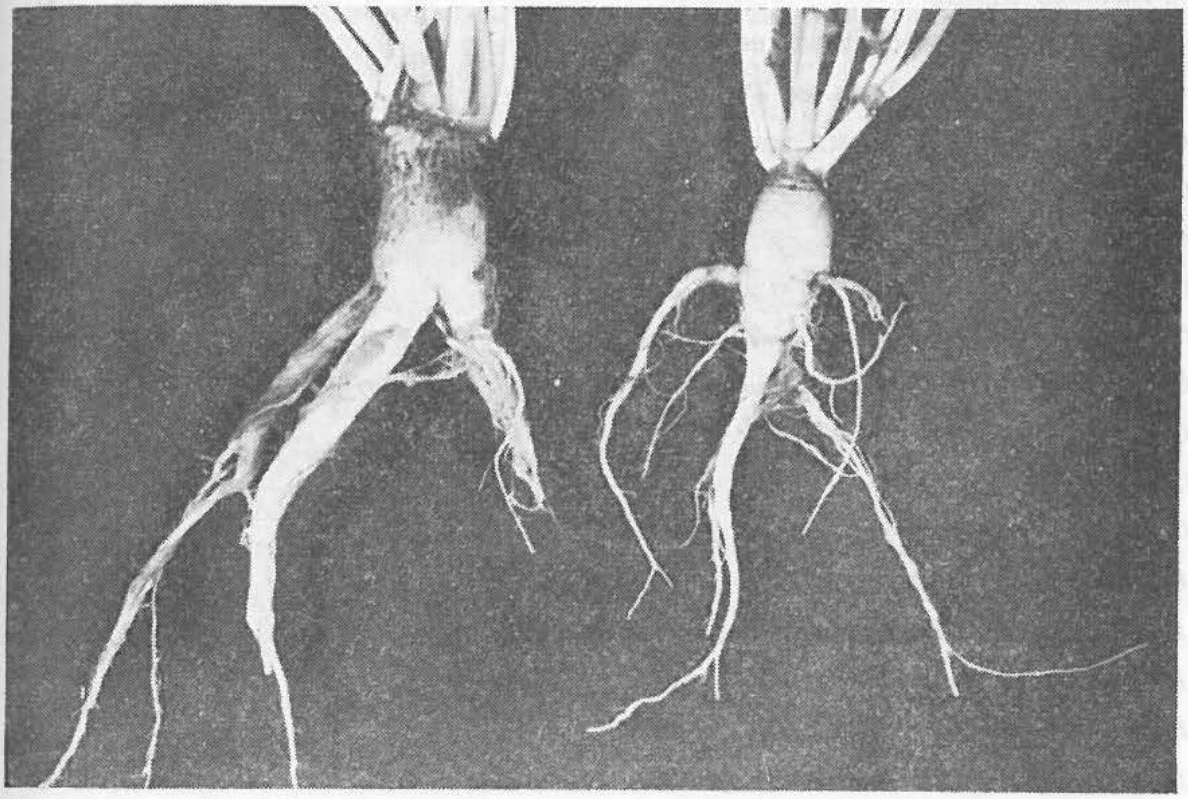
2. 左巻茎のヒノキアスナロ ヒノキアスナロ *Thujopsis dolabrata* SIEB. et ZUCC. var. *Hondai* MAKINO は福島県でも西北部の山地には所々に生育しているので，さまで珍重すべきものではないが，ここに目通りで幹の周囲が2.6 m，高さ30 m もある大木で幹がぎりぎりと左巻に捲れている美事なヒノキアスナロがあるのは珍しい。

野沢町から新潟県境の九才坂に通ずる山径の中間に安座という部落があり，その部落の一遇に赤城神社がある。この神社の境内にはスギ・モミ・ケヤキ・コウヤマキなどよく茂つて昔ながらの静寂さを保つているが，社前の右側にモミの大木（幹の目通囲6 m，高さ40 m）と並んで，このヒノキアスナロがある。幹は捲れている為か表面の樹皮は剝れ落ちて橙黄色の木栓層があらわに出ているので，その幹は一際目立つ美しさである。福島県の名物にしてもよいのではなかろうか。

※ 福島大学学芸学部生物学教室

3. 沼沢沼のアザキ大根 福島県只見川沿の沼沢沼と中川村との中間地帯に上野ケ原（うわのがはら）と呼ばれる火山灰質の高原がある。此の高原は標高700 m許りのところに開けた幅1 km，長さ4 km，ばかりの草原であるが，土質の関係上あまり普通の草木は生えず，カタクリ・タンポポ・アサツキなどが生えているに過ぎない。ところが最も面白いことは，此の高原一帯に野生化した大根が一面に生え茂つていることで少いところでも坪2—3本，多いところでは坪100本以上も生えているのだから，花の盛りには誠に美事なものである。土地の人々はこれを弘法大根とかアザキ大根とか呼んでいるが，土地の人にきいて見てもアザキという意味を説明してくれた者はなかつた。然し，私は，此の地方から新潟県の一部にかけてナラやクヌギの様な薪炭によい木をカタギ（堅木）と呼び，それ以外の雑木（あまり役に立たない木）をアサギ（浅木）と呼んでいるので，或はアサギダイコン（役立ずの大根の意）と呼んでいたのが，遂になまつてアサギがアザキとなつたのではなかろうかと考へている。もとより此の大根も伊吹山のネズミダイコンの様に何時の頃にか人家より脱出して野生化したものであろうけれども，いくら土地を深く軟らかく耕して大切に栽培しても，なかなかにその野性を失わせ得ないのは不思議である。

私は現地より種子を採集して来て，友人の畑や学内の試験地に3年越し連続栽培して見たが，その野性型は一向に治らず，支根の多い粗雑な硬い根を力一杯ふん張つている様は写真に示した通りである。



3年越し連続栽培して，尚且つ野性を失わぬ沼沢沼上野ケ原のアザキ大根（1955年9月2日　蜂谷剛氏撮影）